

大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説

古坂 紘一

山口益博士が『中辺分別論釈疏』(1935)において指摘されているように⁽¹⁾、『瑜伽師地論菩薩地』菩薩功德品と『大乘莊嚴經論』功德品には「大乘」(mahāyāna)の語義に関する七種の理由(七大性または七大義)および「摂大乘」(mahāyāna-saṃgraha)に関する八種の理由が数えられているが、その内容にはそもそもどのような相違点と共通点があるのかについて以下に比較検討を試みたい。比較に先立ち、これらの論典の議論では『瑜伽師地論菩薩地』地品に明示される菩薩の七地、十三住および『十地經』の十地の対応関係が前提になっているので、まずその一覧を記しておきたい。

表1 七地、十三住、十地の対応関係⁽²⁾

七地	十三住	『十地經』の十地
1 種姓地	=1 種姓住	
2 勝解行地	=2 勝解行住	
3 淨勝意樂地	=3 極歡喜住	1 歡喜地
4 行正行地	=4 増上戒住	2 離垢地
	5 増上心住	3 發光地
	6, 7, 8 増上慧住	4 焰慧地 5 難勝地 6 現前地
	9 有加行有功用無相住	7 遠行地
5 決定地	=10 無加行無功用無相住	8 不動地
6 決定行地	=11 無礙解住	9 善慧地
7 到究竟地(雜地)	=12 最上成滿菩薩住	10 法雲地
	13 如來住	

1. 『瑜伽師地論菩薩地』(BBh)菩薩功德品と海雲注(BVy) および『瑜伽論記』(倫記)における大乘の七大義

まず『瑜伽師地論菩薩地』(BBh)菩薩功德品では、「これら七つの大性(mahattva)をとともなう諸菩薩の乗り物が大乘といわれる。」と言う。【BVy: 七種の大性をとともなうので菩薩は摩訶薩(mahāsattva)と言われる。それゆえに功德を説くことを通して大性を説くのである。七種を更に要約すれば道と道果に関して立てられる。果と結び付く菩薩の道が大乘であるので「大」と立てられる。】そして以下(a)～(g)の「七つの大性」(七大義)が述べられる。

(a=1)「法の大性。即ち十二分教の中の菩薩藏の方広なるものの(大性)である。」【BVy: 道も亦二種である。即ち行の法と教説の法の区別による。(後者)一者によって教説の法の大

—大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説—

性が立てられる。極めて膨大な經典をもつからである。それゆえに〈方広なるもの〉というが、大乘の広博な典籍が大乘（マハーヤーナ）であると言われるからである。】

- (b=2)「発心の大性。即ち一類の者が無上正等菩提（を願う）心を起こすことの（大性）である。」【BVy：行の法は五種である。即ち第一は願うこと（願）であって、それゆえに〈発心の大性〉といわれる。一切の功德と過失を生ずるものを捨てた究極の位に達した（仏陀の）菩提に向かって発心すること、それが大いなることであるからである。】
- (c=3)「勝解の大性。即ち一類の者がまさにその法の大性において信解を起こすことの（大性）である。」【BVy：淨意樂地における行を成就することに結び付くのが第二（の行の法）である。それを〈信解の大性〉というのである。甚深広大の法を信解することが大きいということである。】〔倫記：前三は唯地前〕
- (d=4)「増上意樂の大性。即ち一類の者が勝解行地を超えて淨勝意樂地に入ること（の大性）である。」【BVy：通達を特性とするのが第三（の行の法）である。それを〈増上意樂の大性〉というのである。自他における平等性を体得するゆえにそれは大性である。】〔倫記：唯地上にあるのみ〕
- (e=5)「資糧の大性。（即ち）およそ福德資糧と智慧資糧⁽³⁾の完成によって無上正等菩提を現等覚する、（その資糧の大性）である。」【BVy：資糧のすぐれていることが第四（の行の法）である。それを〈資糧の大性〉というのである。（十）地に入った（菩薩）がそれぞれの刹那においても無量の福德と智慧の資糧を積み重ねるゆえに、それは大性である。】〔倫記：測は二地已上と云い、景は地前地上に通ずと云う〕
- (f=6)「時の大性。（即ち）およそ三阿僧祇劫によって無上正等菩提を現等覚する、その時間（の大性）である。」【BVy：すぐれた時をもつことが第五の（行の法の）時の大性である。それのために〈三阿僧祇劫〉云々という。】〔倫記：始終に通ず〕
- (g=7)「圓證の大性。（即ち）およそその（仏）身の体得にそれ以外の身体の体得が匹敵するものではなく、況や上にあるものもなく、有り余るものもない、そういう無上正等菩提（の大性）である」【BVy：果の大性と（いわれるの）は一切の有情を正しく超出した仏陀の〈身体〉を正しく証得するからである。】このBVyのいう「果の大性」という用語は後述の『莊嚴經論』等にも登場する。〔倫記：所証の菩提〕

さて『菩薩地』の本文では続けていう。「その中およそ法大性、発心大性、勝解大性、増上意樂大性、資糧大性および時大性というこれら六大性は圓證大性の因となるものであり、またその圓證大性一者はそれら六種の（大性の）果の位にあるものであると知るべきである。」【BVy：六つの大はこれらによって行くようにするが故に乘と言われる。即ち因を自性とするものとして説く。第七はここに至るために乗と言われる。即ち果を自性とするものとして説くのである。】

このように、BBhでは(a)～(f)を因とし、(g)のみを果とし、また因の中に(c)勝解大性(d)増上意樂大性(e)資糧大性の因果関係を立てることが特徴的である。これは『菩薩地』住品の十三住の因果の関連構造を念頭においたものと考えられるが、因の中に因果関係を含意させていることが特徴的である。またBVyでは因の大性について、(a)の教説の法の大性と(b)～(f)の五つの行の法の大性に二大別している。教説は菩薩の行以前の因と考えるからであろう。

——大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

この菩薩地の七大性の規定と無著の『顯揚聖教論』撰淨義品⁽⁴⁾の所説は同様の内容である。このことは倫記でも「此れと顯揚所明の七大性とは同じ」と指摘している。また無著の『金剛般若論』卷上⁽⁵⁾では「如菩薩地持中説」と出典を明記して「菩薩」の七種大として規定しており⁽¹⁾、これらが瑜伽行派の大乘に関する解釈の説明方式の一つの系脈を形づくっている。

2. BBh とBVy および倫記における摂大乘の八法

続いてBBh「功德品」は次の八つの働きが摂大乘、すなわち大乘を統括するものであると説いている。〔倫記:景云く、上の七は大を解し、此の八は即ち乗の義を解す。〕

「次の八法は一切の大乘を統括する為に働く。即ち

(h=1) 菩薩蔵を説き示すこと。】【BVy: 八種の法とは能詮と完全な所詮である。その中、所詮とは四種の般若⁽⁶⁾を得ることと、その果に関して立てられるものである。即ち世俗諦と第一義諦が大乘の原理によって統括される。能詮に関して(ここに)〈菩薩蔵を示すこと〉と言う。方広の支分(経典)によって統括されているからである。】⁽⁷⁾

(i=2) 「まさにその菩薩蔵において一切法の「真実義」を明らかにすること。」

(j=3) 「まさにその菩薩蔵において一切の仏菩薩の不可思議にして最も広大な力を顕示すること。】【BVy: 完全な所詮に関して〈真実義を明らかにすること〉と、〈力を顕示すること〉というが、(それらは)甚深広大な所詮であるからである。】〔倫記: 中に於いて前の三は教に就いて乗を辨ず。〕

(k=4) 「そしてそれを理にしたがって聴くこと。】【BVy: その中、聞所成慧に関して〈理にしたがって聴くこと〉という。】

(l=5) 「理にしたがって思にもとづく勝意樂を獲得すること。】【BVy: 思所成慧に関して〈理にしたがって思うこと〉という。修所成慧は三種であって、初・中・後である。第一(初)は見道によって統括されている。そのために〈理にしたがって思にもとづく勝意樂(すぐれた意志)を獲得すること〉という。即ち初地(に到達する)ということである。】

(m=6) 「勝意樂の獲得にもとづく修行の相に入ること。】【BVy: (修所成慧の) 中は修道によって統括されている。そのために〈修行の相に入ること〉という。その後の八地(を得る)ということである。】〔倫記: 次の三は次(第)の如く聞思修の慧なり。即ち行に就いて乗を辨ず。〕

(n=7) 「修行の相に入ることにもとづいて、修行の結果を成就すること。】【BVy: (後に) 究竟の位によって統括されるもののために〈修行の結果を成就すること〉という。十地(に到達する)ということである。】〔倫記: 第七は是れ智果〕

(o=8) 「まさにその修行の結果の成就によって究極的に出離することである。】【BVy: 果を示すために〈究極的に出離すること〉という。】〔倫記: 第八は是れ断果。即ち(第七と第八は)果に就いて乗を辨ず。測云く、前の五は並びに勝解行位に在り。第六は初地已上乃至九地に在り。第七は第十地に在り。第八は佛果に在り。〕

BBh 本文は以上のように「摂大乘」を分析して「まさにそのように実践している菩薩こそが無

——大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

上正等菩提を現等覚するのである。」と結ぶ。ここでは特に (h) ～ (j) で「菩薩藏」の顕示を、(k) ～ (m) で聞・思・修の三慧の連関を論及するが、しかし種姓、発心、十地等について本文では何も語っていないことが注目される。

3.『大乘莊嚴經論』(MSA) 功德品および安慧注 (SBh) における大乘の七大義

これに対して『大乘莊嚴經論』(MSA) 功德品では次のように規定している。

「大乘の大性を分別する二つの頌 (に云う)。【SBh: <大乘の大性を分別する二つの頌> ということにおいて、利他の完成に入るその菩薩は利他の完成に限らず自利の完成をも伴う。その場合自利の完成とは何かというと (菩薩が) 大乘のそれ自体の大性 (体大) をもつことである。その場合大乘の体大にも七種の体大がある。七種の体大に大乘と名付けられるのである。七種の体大も二種の体大に約される。因の大と果の大である。】

「所縁の大性と、同様に (自利、利他の) 両者に於ける行の (大性) と、智と精進策励と、方便善巧と、証得の大性と、仏陀の事業の大性; この大性を伴う故に実には大乘と言ひ表される。」【SBh: 七種の大性を具える故に大乘と名付けられる。七種の大性とは所縁の大と、二行の大と、二智の大と、精進策励の大と、方便善巧の大と、証得の大と、仏陀の事業の大である。】

「七種の大性を伴う故に、大乘と名付けられるのである。

(A=1) 所縁の大性によって、無量の広大な經典等の法が伴うからである。」【SBh: 声聞達は三蔵のみを所縁とするのに尽きるが、菩薩達は甚深広大な経蔵、十萬頌般若波羅蜜等無慮十萬の経蔵を所縁とするので所縁が大であるというのである。】

(B=2) 「行の大性によって、自利と利他の両者を成就するからである。」【SBh: 声聞達は自利のみを成就するのに尽きるが、菩薩達は自と他の両者の利益を成就するので行が大であるというのである。】

(C=3) 「智の大とは 通達の時人無我と法無我の二つの智による。」【SBh: 通達の時とは初地においてということである。初地の時に人無我と法無我の二に通達するので、智の大という。声聞の地によっては 見道の預流を得る時にも人無我以外に未だ通達していない⁽⁸⁾ 故に智が大であるとは云われないのである。】

(D=4) 「精進の大とは三阿僧祇劫の間常に謹んで修行するからである。」【SBh: 声聞達は三生あるいは七生のみ精進策励するが、菩薩達は綿密に三阿僧祇劫の間精進策励する。それゆえに精進策励が大であるという。】

(E=5) 「方便善巧の大性とは煩惱に染まることなく輪廻を捨てないことである。」【SBh: 声聞達は生と老等が苦を伴うことを見、涅槃は寂靜を特相とすると見ることにより、輪廻を捨てて、涅槃を実現しようと思う故に方便が大であるとは云われない。(それに対して) 菩薩達は般若と (慈) 悲をもつので (慈) 悲によって輪廻を捨てず、般若によって輪廻に留まっても生死輪廻の煩惱に染まることがない。例えば蓮の花が泥から生じて泥の汚れに染まらないのと同様に留まるので、方便善巧が大であると云われるのである。以上は因の大性を説いているのである。】

— 大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説 —

(F=6)「証得の大性とは力と無畏等の不共法を得るからである。」【SBh：聖（位の）声聞達は結局阿羅漢果、（十）遍処、（八）勝処および六神通のみ以外に得るところはないが、菩薩達によつては究極的に（十）力と（四）無畏（等の、百四十）不共法等、無量の功德が得られる（ので証得）が大きいということである。】

(G=7)「仏陀の御事業の大性とは、しばしば大菩提を示すことと、大涅槃を示すことである。」【SBh：声聞達は阿羅漢果を得て涅槃を得たならば、大菩提と法輪を転ずる等の事業は行わないが、菩薩達は（1）悟りを開いてからも有情を救済するために色究竟天宮に入ることと、（2）入胎と成覚等から大般涅槃に至るまでの間法を説く御事業をなさったので事業が大であると云われる。それら二種によって果の大きさが説かれている。】

このような七種の大性とはほぼ同様の内容を示すのが安慧の『中辺分別論釈疏』無上乘品および安慧の採えた『大乘阿毘達磨雜集論』法品であり⁽⁹⁾、BBhとは別の解釈の脈絡を形成している。倫記はこのことについて「対法の七大性と莊嚴の七大義は名を異にするも、体は同じなり。此の論とは同じならず」⁽¹⁰⁾と記している。このMSAでも七大義を因と果に分けているが、BBhのように因の中にさらに因果関係を含意させるようなことはない。しかも果を二種数えているのも菩薩の行よりもむしろその結果の方に重点を置いている視点の現われのように思われる。なおここで安慧が大乘性を声聞乗と対比して明示しようとしているが、そういう対比的な説明もBBhの方には見られない。

4. MSA およびSBhにおける摂大乘の八法

次に摂大乘についてMSAでは、

「摂大乘を分析する偈頌は二つである。」【SBh：大乘の体大を具えた（菩薩）達は声聞と独覚の乗に依拠して涅槃（界）に住む⁽¹¹⁾ことがなくはないが、大乘の体大によって無住处涅槃（界）に住む。それ故に大乘の体大の後に摂大乘の一節が説かれる。その場合大乘というのは十萬頌般若波羅蜜の中で華嚴經等を取って（*rmad-ga-cad la sogs-pa la bya-bas*）⁽¹²⁾大乘の意味を説くならば無量であるけれども、それら無量のものを統括すれば八種の法の中に大乘の意味が余すところ無く集約される。そこで八種の法を（摂）大乘というのである。その場合八種の法を統括するのも、種姓に住する菩薩が無上の菩提に向かって発心して解行地において菩薩の行としての六波羅蜜を成就して、その後に十地の次第によって修行して仏地が実現されたこと、それらを（摂）大乘と呼ぶことを目的としている。】

「次の十種（漢訳では八種）⁽¹³⁾のことがらによって大乘全体が統括される。（H=1）種姓と、（I=2）法を信じることと、（J=3）そのように心を生じることと、（K=4）布施等を成就することと、（L=5）無過失に入ることと、有情を成熟することと、（M=6）（仏）国土を清浄にし、（N=7）無住处涅槃（に入る）ことと、（O=8）最勝の菩提をも示現することである。その中、有情の成熟をするとは、地に入った（菩薩）の第七地までにおいてであると知るべきである。国土をも清浄にし、無住处涅槃（に入る）のは不退転の地、第八、九、十の地においてである。最勝の菩提は仏地においてある。まさにそこにおいて現等覺と大涅槃の示現があると知るべきである。他のこ

——大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

とは已に理解された。』

- 【SBh：(H=1) 種姓ということと種子ということ、福分があるということの意味は一つである。意味の上では布施から般若波羅蜜に至るまで、六波羅蜜の種子があることを種姓という」のであって、これは種姓において存在するということの意味を示している。即ち第一種の法である。
- (I=2) そのように大乘の種姓があることにより、甚深広大の法をも一心に信仰することを法を信じるというのである。即ちこれが第二種の法である。
- (J=3) 菩薩の種姓もあり、甚深広大の法をも信じるようになり、その後に自己と一切の有情を利益するために無上の菩提を得るようになろう、と発願することが発心といわれる。即ちこれが第三種の法である。以上で種姓に住して無上の菩提に向かって発心することの意味が述べられたのである。
- (K=4) そのように無上の菩提に向かって発心して解行地において布施波羅蜜から般若波羅蜜に至るまでの六波羅蜜を成就することが第四種の法である。それによって菩提心を起こしてから解行地において六波羅蜜を成就することの意味を示しているのである。
- (L=5) 所取と能取に執着することが過失であり、初地において所取と能取に執着することを捨てるのであるが、解行地において六波羅蜜を成就することにより初地を得る。故に（布施等を成就すると）過失が無くなるというのである。これが第五の法である。
- (M=6) それより二地を始めとして第七地以下において菩提分と、諸々の波羅蜜の法によって教義を信奉しない有情をして教義を信奉させ、教義を信奉するものは善に着くようにして成熟する。これが第六の法である。
- (N=7) それより不退転の地、第八、九、十の地においては仏国土を清浄にし、無住处涅槃の道に住む。即ちこれが第七の法である。その仏国土を清浄にすることにおいては器世間を水晶や金等の色に輝かせる。無住处涅槃の道とは智と（慈）悲の二である。即ち慈悲によって生死輪廻を捨てないが、特定の涅槃（界）に住むことはない。（また）菩薩は有情のために生死輪廻に留まるけれども智慧の力によって輪廻の罪過に染まることはないので、輪廻に依存することがない。
- (O=8) それより十地を超えて十一地（に入った）仏陀は三身を得ているので菩提者といわれるが、菩提者から母胎に入り、胎から出ることと、宮殿から出て出家を示すこと等を示現して、現等覺と、転法輪と涅槃に至るまでのことを示す。即ちそれが第八の法である。それゆえ（摂）大乘ということも要約すれば、種姓を始めとして大般涅槃に至るまでを示現することが（摂）大乘と呼ばれるということである。】

MSA の七大義の説明では行法と行法の間の因果関係が言及されなかったのに対して、この摂大乘に関する安慧（SBh）の説明では整然と順序立てて十地の実践段階が摂大乘の内容として位置づけられている。しかし BBh にいう「勝解行地」は言及されてはいるものの、聞思修および勝意樂はここでは捨象されている。また（J）の発心では、BBh（b）の発心の大性では言及されなかった利他の概念が取り上げられている。

——大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

これら七大義および八法のうち、(a) の法大性と (A) 縁大、(f) 時大性 = (D) 勤大 のように、内容の上で共通する項目もあるが、(k) 如理聽聞あるいは、(H) 種性のように、他に対応する項目のない特有のものもある。

ちなみにそれぞれの項目を BBh、MSA それぞれを基準にした場合を対比して、表によって示して見よう。=によって共通する項目、コロン (:) によって内容的に概ね対応する項目を表わし、二重のコロン (::) によって緩やかな対応が見られる項目を表わす。下線を引いた項目は、大乘の項目に対応しつつ他の論で摂大乘のグループに見られるというように、場所がクロスしている場合を示す。

(表 2 七大義の対比)

BBh	MSA
因 法大性 (a)=(A) 縁大	因 縁大 (A)=(a) 法大性
因 發心大性 (b):(J) 發心	因 行大 (B) <自利利他> ——
因 勝解大性 (c):(I) 信法	因 智大 (C) <二無我智> ——
因 増上意樂大性 (d): 趣勝意樂 (l) :(L) 入道 <初地>	因 勤大 (D)=(f) 時大性
因 資糧大性 (e)::(K) 行行	因 巧大 (E) <般若慈悲> ——
因 時大性 (f)=(D) 勤大	果 果大 (F):(g) 圓證大性
果 圓證大性 (g):(F) 果大	果 事大 (G): (h)(i)(j)

(表 3 摂大乘八法の対比)

BBh	MSA
菩薩藏教 (h):(G) 事大	種性 (H) ——
顯示諸法眞實義教 (i):(G) 事大	信法 (I):(c) 勝解大性
顯示大威力之教 (j):(G) 事大	發心 (J):(b) 發心大性
如理聽聞 (k) ——	行行 (K) <六波羅蜜> ::(e) 資糧大性
趣勝意樂 (l):増上意樂大性 (d):(L) 入道 <初地>	入道 (L):(l) 趣勝意樂:(d) 増上意樂大性
入修行相 <九地> (m)::(M) 成熟衆生	成熟衆生 <初七地> (M)::入修行相 (m)
修果成滿 <十地> (n)::(N) 淨仏国土	淨仏国土 <不退八九十地> (N)::修果成滿 (n)
成滿究竟出離 (o):(O) 菩提勝	菩提勝 <仏地> (O): 成滿究竟出離 (o)

このように見てくると瑜伽行派の論典では大乘と摂大乘の解釈をめぐって BBh 型と MSA 型二つの異なった系があったことが分かる。では無著の『摂大乘論』の所説はどちらに類するのだろうか。概観した限り、その (1) 応知依 (種子) は H; (4) 入因果は K; (5) 修異は (M, N); (10) 智は (o, O) と対応する。これを見ても『摂大乘論』の章の立て方は BBh よりもむしろ MSA の科段に近い。とすれば両者を踏まえつつ、BBh 乃至『瑜伽論』よりもむしろ MSA 偈頌の摂大乘観に準拠して摂大乘説をまとめなおしたのが無著の『摂大乘論』であったということになるであろう。このことは宇井博士が、『摂大乘論』は MSA と密接な関係にあり、『瑜伽論』と MSA の両系統を総括したものであるとされた方向にほぼ一致する所でもある⁽¹⁴⁾。

ところで、BBh の最終章「次第瑜伽処」(アヌクラマ) においては菩薩地全体の章立てと章の内容が順次因果的に関連づけて説明されるが、中でも「菩薩功德品」のことが特に詳しく分析され、

——大乘と撰大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

功德品の内容が二種に分けて正行功德殊勝（行の徳が勝れていること：pratipatti-guṇaviśeṣa 行功德）と可称讃功德殊勝（称賛の徳、利益を与える徳の勝れていること：anuśaṃsa-guṇa-viśeṣa 讃功德）と呼ばれている。しかしその名称は、BBh の中では他に例がなく、菩薩地の中でのアヌクラマの独特の視点を表わしている。ところがこれらの名称は、MSA の無性と安慧の注釈書に登場する⁽¹⁵⁾。しかし玄奘以前の漢訳、曇無讖訳（c. 410 A. D.）と求那跋摩訳（431 A. D.）にはこの章全体が欠如している。これらのことから、アヌクラマは求那跋摩訳以後、玄奘以前の時代のインドの瑜伽行派の中のいずれかの注釈家によって無性・安慧の MSA の註釈を参考にして、補足されたものであろう可能性が考えられる。ここに見た「大乘」「撰大乘」は BBh アヌクラマでは讃功德の一部として捉えられているが、しかし無性・安慧の MSA の註釈では行功德として捉えられている。したがって BBh 自体の成立過程の末端に位置するアヌクラマにおいて、無性、安慧の MSA 註の考え方を、無性でも安慧でもない別の論師が借用して取り入れていった形跡がここに見られるといえよう。

ところで BBh と MSA の間には、引用関係から、またより整理された形態を示す点から後者の方が概ね後に形成されたとすでに多くの学者によって指摘されているが、前述のように BBh の最終章が MSA の無性、安慧の註よりもさらに後の付加であることが考えられるので、ある部分は『瑜伽論』の方が遅れて形成されていたというように見るべきであろう。

しかし菩薩地のアヌクラマで功德の分類に関してそのような MSA の注釈書からの借用が仮にあったとしても、この「大乘」と「撰大乘」の意味解釈に関しては BBh と MSA の功德品の本文がやはり観点を異にしている、若干の他の論典がそれぞれの解釈に従う形をとっていたということは否めない所である。

BBh は特に淨勝意樂地という楷梯を立てるなどして菩薩の行の楷梯を主眼に置いて修道の因果関係を綿密に論じる。それとは異なったある観点、宇井博士のことは借りれば真諦の立場に立って、要点的に教義を捉え直したのが MSA であると考えられる。しかし上に見てきたように同一の問題を扱いながらも観点を異にするために BBh の場合とは別建ての記述となったのはどういう事情によるのか、延いてはまたなぜ MSA が敢えてそのように別の観点から造論しなければならなかったのかという問題は、成立の先後問題と並んで文化史的観点にとって重要な問題であるといえよう。

参考文献と略号

- Rnal-'byor spyod-pa'i sa las Byang-chub sems-dpa'i sa (東北 No. 4037)
 : Bodhisattvabhūmi ed. by U. Wogihara 1936; ed. by N. Dutt 1966
 : 『瑜伽師地論』(大正 30) 菩薩地菩薩功德品 [BBh]
- Rnal-'byor spyod-pa'i sa las Byang-chub sems-dpa'i sa'i rnam-par 'grel-pa /
 : Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmi-vyākhyā by Sāgaramegha (東北 No. 4047: 海雲註) [BVy]
- 道倫撰『瑜伽師地論記(上)』(新文豊, 1976) [倫記]

——大乘と摂大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

- 無著 (Asaṅga) 『顯揚聖教論』 撰淨義品 (大正 31)
 無著 (Asaṅga) 『金剛般若論』 卷上 (大正 25)
 Mahāyānasūtrāṃkāra. ed. par Sylvain Lévi, Paris, 1907.
 : Mdo-sde'i rgyan gyi bshad pa / Sūtrāṃkāra-vyākhyā (東北 No. 4026)
 : 『大乘莊嚴經論』 功德品 (大正 31, p. 654-655) [MSA]
 Mdo-sde'i rgyan gyi 'grel bshad / Sūtrāṃkāra-vṛtti-bhāṣya by Sthiramati (東北 No.4034:
 安慧註) [SBh]
 安慧 (Sthiramati) 糅『大乘阿毘達磨雜集論』 卷十一 (大正 31)
 : Tatia's Abhidharma Samuccaya Bhāṣya, Patna 1976.
 山口益訳注『中辺分別論釈疏』 鈴木学術財団, 1935 (1966)
 宇井伯寿『瑜伽論研究』 岩波書店, 1958 (1979)
 宇井伯寿『大乘莊嚴經論研究』 岩波書店, 1961 (1979)
 L. Schmithausen, Der Nirvāṇa-abschnitt in der Vinīśayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ,
 Wien 1969
 野澤静證「智吉祥造『莊嚴經論總義』について」『仏教研究』 2-2, 1938
 小谷信千代「瑜伽師地論の大乘莊嚴經論に対する先行性に関して」『日本西蔵学会会報』 26, 1980
 岡田行弘「『大乘莊嚴經論』 XIX 功德品について——“urtext”の推定——」『印仏研究』 29-2, 1981,
 p. 636-7.
 小谷信千代「チベットにおける莊嚴經論の研究」『日本西蔵学会会報』 28, 1982
 小谷信千代『大乘莊嚴經論の研究』 文栄堂書店, 1984
 ソナム・ギャルツェン・ゴンタ「トクメー・サンポによる『大乘莊嚴經論』 菩提品の註釈につい
 て——四智説と五智説——」『日本西蔵学会会報』 37, 1991
 羽田野伯猷先生編『瑜伽師地論菩薩地戒品』 法蔵館, 1993
 磯田熙文, 古坂編『瑜伽師地論菩薩地〈随法・究竟・次第瑜伽處〉』 法蔵館, 1995
 拙稿「『瑜伽師地論菩薩地』の最終章をめぐって」『大阪教育大学紀要』 第 I 部門 44-2, 1996

注

- (1) 山口益訳注『中辺分別論釈疏』 p. 321, n. 5 参照。
- (2) 磯田熙文, 古坂編『瑜伽師地論菩薩地〈随法・究竟・次第瑜伽處〉』 p. V.
- (3) 『菩薩地』 自他利品によれば、福德資糧は施・戒・忍の三波羅蜜に、智慧資糧は智慧波羅蜜に配当され、精進・静慮波羅蜜は両者に通じるとされる (大. p. 485)。
- (4) 『顯揚聖教論』 撰淨義品 (大正 31, p. 520c)
- (5) 『金剛般若論』 卷上 (大正 25, p. 759b)
- (6) BBh 慧品にいう「一切門慧」の四種即ち聞所成慧、思所成慧、思沢力所撰慧、修習力所撰慧を指すのであろうか。
- (7) ここにいう菩薩蔵がいわゆる「菩薩蔵經」とどのようにかわるのかについては未検討である。
- (8) 十六行相の無我が苦聖諦の一相であることに基づくと考えられる。
- (9) 『大乘阿毘達磨雜集論』 卷十一、大正 31, p. 743-4.; Tatia's Abhidharma Samuccaya Bhāṣya, p. 96, § 118.

——大乘と撰大乘の語義に関する瑜伽論と莊嚴經論等の所説——

- (10)『瑜伽師地論記(上)』(新文豊) p. 565.
- (11) 涅槃(界)に住む: mya-ngan las 'das-pa'i gnas su 'byung-bar. Cf.『瑜伽師地論撰決択分中有余依及無余依二地』涅槃界中現在転時 mya-ngan las 'das-pa'i dbyings la gnas te / : Schmithausen, Der Nirvāṇa-abschnitt, S. 40, 73, 82f. 参照。
- (12) rmad-ga-cad: rma-ga-chad: rmag-chad: rmad-chad:『華嚴經』の別名。『藏漢大辞典(中)』(民族出版社, 1985)
- (13) 実際には八項目数えられるのみである。漢訳では「此八事総撰一切大乘」となっている。
- (14)『瑜伽論一般では俗諦の立場で説をなし、その俗諦の立場から真諦を見て行く仕方を取り、莊嚴經論は却って真諦の立場を取り、その真諦から俗諦を其まに見て行く仕方であると思はれる』(『瑜伽論研究』p. 51)。
- (15) 野澤静證「智吉祥造『莊嚴經論總義』について」『仏教研究』2-2, p. 116; 岡田行弘「『大乘莊嚴經論』XIX 功德品について——“urtext”の推定——」『印仏研』29-2, p. 636. なお智吉祥(Jñānaśrī)の『莊嚴經論總義』(Sūtrāṃkārapīṇḍārtha: Tohoku No. 4031, Derge 189a1)では、大乘と撰大乘は24功德のうちの第21と第22の功德としてそれぞれ「大乘とその結果」という表現で列挙されているに過ぎないが、撰大乘を大乘の結果とする捉え方は注目に値する。